

# そら

～少女の日常～

月花

そら

～少女の日常～

私の暮らす

屋敷の昼下がりの日常は、

ぼんやりと空を眺める

私を勉学へ向かわせるという

「問題」

を誰が引き受けるか、

押しつけられるか、という、

使用人たちの

くだらない諍いで、

それは、

ますます、

私を現実から遠ざけた。

私には今、実母はいない。

意地の悪い継母も、

継母に追従する父もない。

父と継母。

両親は穏やかで、

空を見上げて、

一人ほほ笑む私に

怒りも恐れもしない。

継母は時折、

私の隣に座り、

私の視線を追いながら、

所謂、井戸端会議を行った。

我が家は非常に裕福だ。

父は口にしないことだが、  
普通の子どもは  
学校に通うのだろう。

それすら、  
家の中で  
家庭教師によって行われる。

継母に、  
広い屋敷と敷地はあれど、

井戸端会議の会場となる、  
そんな場所がないのも、  
うなずけようものだった。

そして、  
私は飽くことなく  
空を見上げる。

身体から力が抜ける、  
この時間が好きだった。

空は...青い――。

別に、  
勉強は嫌いではない。  
ただ、  
少しばかり面倒なのだ。

家庭教師は  
落ち着いた雰囲気男性で、

身長が低いと  
使用人たちに笑われては、

うんうんと納得していた。  
変わった人だ。

今日は  
芸術についての話だったので、

そうややこしくもなく、  
わりあいと  
気分は良かった。

そうでなければ、  
10分も椅子に  
座っているものか。

家庭教師は  
大きな絵を  
幾つか持ってきていた。

特別、有名な人の絵ではない。

この絵の選択は、  
家庭教師の好みで  
行われたものだろう。

なかなか、素敵な絵があった。

朝焼けが地を輝かせて、  
太陽がゆっくりと  
浮かんでくるさま。

椅子を蹴って  
立ち上がった。

外へ走り出る私を  
家庭教師は止めない。

使用人たちが騒がしい。

しかし気にせず、  
空を見上げた。

空は...青い――。

私は空を見上げる。

心地よい、  
そよかぜにのせて歌を歌った。

ただの民謡で  
どこの家庭でも耳にするような、  
我が家には不思議な取り合わせの歌。

母が歌ってくれたものだ。  
私の実の母が。

もう、顔も覚えていないが  
何故か歌だけは覚えている。

つながっているのだ。この歌と心が。

母は若くして病に倒れたという。  
私を産んでから数年生きた。

奇跡のようだと医者と言ったらしい。  
その時間が私にこの歌を与えた。

階級の低い人間の歌だと  
使用人たちは  
止めようとしていたが、

継母が気に入ったと言い、  
私の歌はそよかぜに乗って飛んでいく。

悪くない...。  
素敵な時間だと思う。

最初から最後まで歌いきると、  
継母は拍手をした。

空は...青い――。



私が空を見上げていると、  
いつもの闖入者が  
ぱたぱたとこちらへ走ってきた。

使用人の追跡を振り払ったのだろう。

この闖入者に関しては、  
使用人に同情せざるを得ない。

どれほど追いかけても  
無駄なのだから。

脚力の差は如何ともし難い。

闖入者の少年は、  
私のところへ辿り着くと、

お菓子お菓子  
と、ねだった。

そう、この  
掬りやかっぱらいをして  
生きている少年は、

我が家の広い敷地に侵入し、  
私からお菓子を受け取ることを  
楽しみとしている。

それを知っている私は  
焼き菓子を差し出した。

継母のお手製で味は保証済みだ。

少年は大喜びで  
焼き菓子を一つ口に放り込んだ。

残りは、

懐に大切そうにしまいこんだ。

妹がいてお菓子の類を  
とても喜ぶらしい。

少年はあっという間に去って行った。

ずっと、  
物陰に姿を隠していた、  
継母がころころと笑った。

空は...青い――。

屋敷の窓辺に立ち、  
朝方の空を眺めていたら、  
青年が寝ぼけた様子で通りかかった。

彼は継母の弟で、  
我が家に住み込んで  
熱心に勉学に取り組んでいる。

父は躍起になって  
結婚相手を見つけて  
家庭を持たせようとしているが、

どんなお見合い相手でも  
話を蹴ってしまうらしい。

世の中には  
変わった人が多いが、

私は青年が  
そう変わっているとは思わない。

私と一緒に空を眺めてしばし、

青年は嗚呼、朝だ。  
顔を洗ってあれやこれや...と

私には解らない  
難しい話をぶつぶつと呟きながら、

おはよう、と  
一つ言葉を残して去って行った。

いつの間にか朝焼けは去り、  
綺麗な太陽は光の色を変えていた。

空は...青い――。

私あまり  
屋敷からでないのは、

我が家の敷地を出ないのは、  
人が多いとぶつかるからだ。

空を眺めて  
ぼうっとするのに  
たくさん人がいたらつまらない。

それが、  
外遊びをしないのかい、と  
父に尋ねられた時の私の答えだった。

しかし、今日は違う。  
昼から大きなお祭りがあると  
闖入者の少年から聞いたのだ。

そして、  
とても綺麗な空を見られる  
高台があるという。

本当は使用人を振り切って  
外へ駆け出していくつもりだった。

そんな私に、  
父が楽しんでおいで、  
継母が行っていらっしやい、  
と言った。

さすがに困惑した。  
すると、家庭教師がやってきて、  
さあ、行こう。と言った。

背後に隠れていた闖入者の少年に  
継母は、よろしくね、と声をかけた。

その景色は素晴らしいものだった。

お祭りの雰囲気から、  
少し離れた高台から見える、  
町と大きな空。

空は...青い――。

桜が見たい。

そう、唐突に思った。

空を美しく染め上げるような  
一面の桜吹雪を...

見たいと思った。

澄み切った夏の空に、  
似合うかどうかは  
分からなかったけれど、

思いは止まらなかった。

今日も勉学に励む  
青年のところへ行って、

いいものを見つuroった。

その作業に没頭していると、  
青年が桜を作るのかい、と  
聞いてきた。

何故分かったのかが  
分からなかったが、うなづくと、

青年は手伝うと言った。  
ありがたいと思って  
ひたすら作業をした。

そして、  
いつも空を見ている  
見晴らしのいい木陰に走って行き、

ばらまいた。

紙片が...

たくさんの千切られた紙のくずが、

視界いっぱいには舞い上がり、  
桜の花弁のようにひらひらと踊った。

その一部は空に  
吸い込まれていっただろうと思った。

空は...青い――。

父の趣味は庭仕事だ。

基本的に評判のいい父が  
首を傾げられる、  
変わり者扱いされる趣味だ。

それは私には  
好ましい趣味であったりする。

幾ら庭で空を見ている、  
あっち、と父を指さすと

使用人一同、  
がっくりと  
肩を落として去って行く。

使用人たちにはどうやら、  
上流階級の人々に対する  
イメージがあって、

それを  
ぶち壊されるのが嫌らしい。

空を見られる以外にも、

採れたてのハーブを  
お茶にしてもらったり、  
季節の果物が食べられたりもする。

今日は、  
私が小さいころから  
植えられていた

柿の熟した実を食べた。  
甘くて美味しい。

父は継母との結婚の際に



庭をもの凄く自慢していた。

幸い、  
継母は気に入ってくれて

ハーブでお茶を淹れたり、  
果物を  
むいたりして皆に振る舞ってくれた。

お菓子作りの上手い継母の  
下手な果物の皮むきに

弟である青年が、  
茶々を入れる。  
私のほうが上手いのは内緒だ。

空は...青い――。

今日は来客があった。

良家の子女...

父の友人の娘だという。

綺麗なお姉さんだと

感心していると、

こんにちは、と

声をかけてきた。

こんにちは、と

周囲が意外がるような、

普通のやりとりをしていると、

継母の弟である青年が

顔を真っ赤にしながら、

話に参加しだした。

他愛ない世間話だったが、

青年の様子がおかしいので、

父に目で問いかけると、

一目惚れかな、と

小さな声で言った。

もの凄く嬉しそうな表情だった。

お姉さんを

いつもの木陰に連れて行った。

空が綺麗に見える、と

言うと、

夜空も美しいでしょうね、

そう言われた。

今度、見てみよう。  
私と青年とお姉さんで、

しばし、  
空を眺めていた。

空は...青い――。

私が色づく  
いつもの木陰で、

いつものように  
空を眺めていると、

継母がぱたぱたと  
走ってきて、  
お兄さまが来たのよ、と  
言った。

継母の兄、  
私の伯父。

忙しい人だから、  
あまり、  
この屋敷には来ないが、

伯父の邸宅へ  
遊びに行くことはよくある。

確か、父の幼馴染だ。  
やることなすこと  
互いに影響を受けている。

と、いうことは。

あの子も満更でもないしねえ、と  
継母も言う。

青年は婚礼包囲網に  
悪い気はしていないらしい。

しかし、  
継母は相手の気持ちが  
気になるようだ。

なので、  
こっそりと手をつないでいたことを  
教えた。

空は...青い――。

私は空を見上げた。  
うっすらと曇っている、  
冬の空。

今日は、  
継母の弟の青年と、  
父の友人のお姉さんの  
新しい門出だ。

婚礼に臨む  
お姉さんはとても綺麗だった。

青年の顔は  
赤くて緊張や幸せが  
伝わってくる。

青年は  
これから  
お姉さんの屋敷に  
住むことになっている。

婿入りというやつだ。

式には、  
元・闖入者の少年も  
紛れ込んでいた。

もちろん、正装で。

継母が楽しそうに  
着替えさせていた。

少年はかちこちに  
固まっている。

私は  
ふたりの幸せを

空に祈り、願った。

空は...青い――。

空は綺麗だ。家族は素敵だ。

私はこの屋敷を  
離れることになる。

父に我がままを言って、  
学校に  
通いだすことにしたのだ。

父が提案したのは寮生活。

屋敷のそばには  
私を受け入れてくれる  
大きな学校がないのだという。

だから、  
初めて自分の屋敷から離れる。

不安がないと言えば嘘になる。

家族や友人たちから  
離れてしまうのは寂しい。

それでも、  
少し広い世界を  
見たくなったのだ。

美しいものは  
待っているだけでは  
出会えない、  
やって来ないと思ったから。

私は、  
父に  
継母に  
青年に  
お姉さんに



家庭教師に  
使用人に  
少年に、  
私を  
送り出してくれる人たちに言った。

「いってきます」

空は...青い――。